

金沢城建物配置図の記載情報について（２）

庄 田 孝 輔

はじめに

『金沢城研究』13号に掲載した拙稿「金沢城建物配置図の記載情報について（１）」において、金沢城建物配置図の変遷や特徴を明らかにするために、その記載情報を読み解き、記載や文字情報の変化を示した。前稿では、特に本丸、本丸附段、東ノ丸、東ノ丸附段、御花畑、薪ノ丸、玉泉院丸と主に城の南側を取り上げたので、今回は残りの二ノ丸、三ノ丸、鶴ノ丸、新丸、御宮、藤右衛門丸、金谷出丸、松原屋敷の記載情報を示し、建物配置図の変化について、所見を示したい。

対象とする絵図は、前稿で取り上げた８種類計24点の絵図と同じである。金沢城全域の建物配置を記した絵図は、宝暦の大火前後で区分し、前期のものがA・B・C・D類に分類される⁽¹⁾。A類がもっとも古い景観を描くとされるもので、7点確認されている。表記の違いなどから3系統に分類できるとみており、加賀八家の横山隆昭家伝来の「金沢城図」（図1）をA－1類、河内山勲家伝来の「金沢城絵図」と金沢大学が所蔵する写本3点をA－2類、県立図書館の所蔵する江戸時代後期の写本2点をA－3類と分類する。

B類は、金谷出丸の御文庫と三ノ丸、鶴ノ丸の櫓が増えていることからA類より後の時期の景観を描くとされたものであり、6点確認されている。凡例により2系統に分類できるとみており、石川県立歴史博物館蔵「金沢城中惣絵図」など3点をB－1類、金沢市立玉川図書館蔵「金沢城図」など3点をB－2類とする。

C類は、御大工の清水家に伝わった「金沢城御殿絵図」で、宝暦の大火直前の景観を描くとされているものであり、この絵図のみ貼絵図であり、貼紙が一部剥がれていることに注意して、考察すべきものである。

D類は作事所作成図を参考に作成された私撰図である。藩用図にない情報がいくつも追加されたもので、「金沢城図」をはじめ4点確認されている。それぞれの由来や情報の位置づけが明らかになれば、金沢城の建物の変遷を明らかにする点において有効な資料となるので、対象に加えたものである。

後期の絵図は4時期に分類されている⁽²⁾。本文において、年代順にⅠ～Ⅳ期と表記することとする。

Ⅰ期絵図は「金沢城内絵図」で、江戸後期の越中の測量家石黒信由の家に伝わったもので、文化7年～文化13年の景観を示すものである。Ⅱ期絵図は前田育徳会所蔵の「金沢御城之図」、横山隆昭家伝来の文政13年作成の「御城中壺分碁絵図」（図2）、藩の御大工であった渡部家に伝わる天保13年写の「金沢城絵図」の3枚であり、写された年代が異なるものの、文政8年から天保3年の景観を描くものである。Ⅲ期絵図は前田育徳会所蔵の「金沢御城内外御建物図」で、天保5年から9年の景観を描くもので、この絵図のみ組図である。Ⅳ期絵図は前田育徳会所蔵「御城分間御絵図」で、絵図に「嘉永3年改正」と記され、弘化2年から嘉永3年の景観を描くものである。

[表 1] 対象絵図一覧

絵図 番号	県教委 絵図リスト 整理番号	名称	寸法 (cm)	所蔵者	分類	凡例
1	(新)	金沢城図	78×79	横山隆昭家	A-1 類	6 色 8 種 (黄) 御家廻御長屋 (朱) 御櫓 (薄墨) 御土蔵 (萌黄) 足軽番所 (藍) 御堀 (浅黄) 土居 (赤印) 塀 墨引之分熨斗建
2	(新)	金沢城絵図	65.5×74	河内山勲家	A-2 類	
3	251	御城御絵図	78×80	金沢大学附属図書館		
4	255	金沢城図	77×96	金沢大学附属図書館		
5	260	金沢城古図	86×77	金沢大学附属図書館	A-3 類	
6	234	金沢城之図	60×67	石川県立図書館		
7	(新)	金沢城全図	62×70	石川県立図書館		
8	200	金沢城中惣絵図	88×74	石川県立歴史博物館	B-1 類	5 色 6 種 黄色・御家廻り御長屋諸役所等 萌黄色・御櫓 薄墨色・御土蔵 朱色・二重塀 但し墨引は土塀掛塀共 浅黄色・足軽番所
9	237の1	惣絵図	84×77	石川県立図書館		
10	(新)	加州金沢城之図①総絵図	77×107	(公財) 三井文庫		
11	37	金沢城図	35×42	金沢市立玉川図書館	B-2 類	6 色 7 種 黄色・御家廻り御長屋等 茶色・御櫓 萌黄色・土居 薄墨色・御土蔵并足軽番所等 朱色・二重塀 藍色・埋水樋 朱引之内藍色之分 溝
12	(新)	金沢城絵図	81×73.5	個人		5 色 6 種 黄色・御家廻り御長屋等 萌黄色・御櫓 薄墨色・御土蔵并足軽番所等 朱色・二重塀 藍色・埋水樋 朱引之内藍色之分 溝
13	254	加州金府御城之図	102×99	金沢大学附属図書館		4 色 4 種 黄色・御家廻り御長屋等 萌黄色・御櫓 薄墨色・御土蔵并足軽番所等 朱色・二重塀
14	13	金沢城御殿絵図	106×141	金沢市立玉川図書館	C 類	6 色 7 種 黄紙・御家廻御長屋 浅黄紙・御櫓并出し 薄墨紙・御土蔵 青紙・足軽番所 朱紙・塀 萌黄紙・土居 墨引之分熨斗立
15	(新)	金沢城絵図	93×110	石川県立歴史博物館	D 類	5 色 5 種 (薄墨) 御タテ物番所等 (朱) 石垣 (萌黄) ドテ (黄) 御門御長屋御土塀御櫓 (墨) 御堀御泉水
16	39	金沢城図	97×104	金沢市立玉川図書館		
17	246	旧金沢城図	93×82.5	石川県立図書館		
18	(新)	金沢城図	146×143	横山隆昭家		
19	290	金沢城内絵図	70×91	石黒信二家	I 期	
20	268	金沢御城之図	131×149.5	(公財) 前田育徳会	II 期	「文政13年作」 「天保13年写」
21	(新)	御城中壱分碁絵図	151×137	横山隆昭家		
22	(新)	金沢城絵図	135×154	渡部亮二家		
23	284	金沢御城内外御建物図	42枚組図	(公財) 前田育徳会	III 期	
24	277	御城分間御絵図	155×213	(公財) 前田育徳会	IV 期	「嘉永3年改正」



図1 前期金沢城建物配置図 (A-1類)



図2 後期金沢城建物配置図 (Ⅱ期)

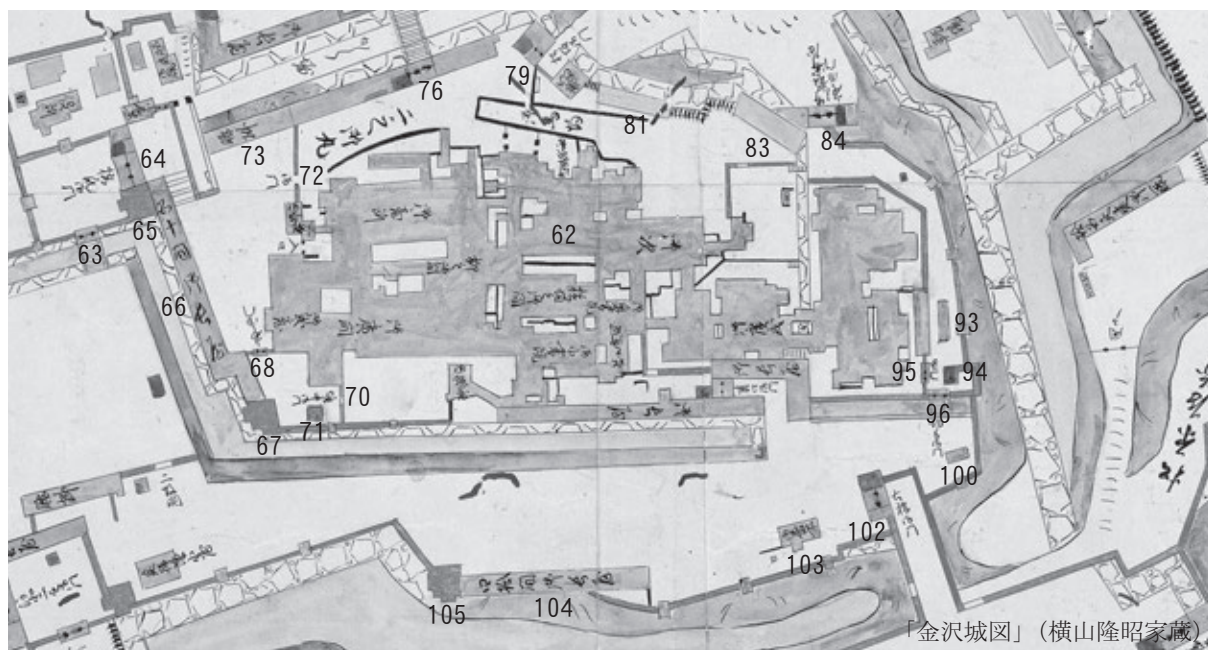


図3 前期 (A-1 類) 二ノ丸

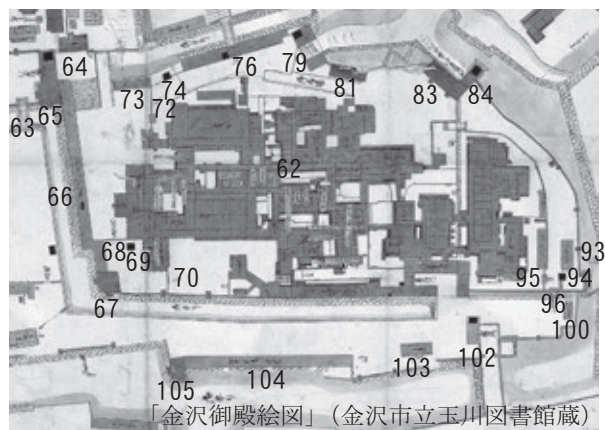


図4 前期 (C 類) 二ノ丸

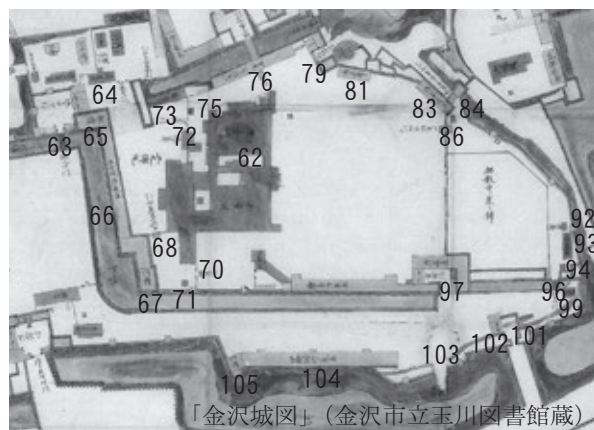


図5 前期 (D 類) 二ノ丸

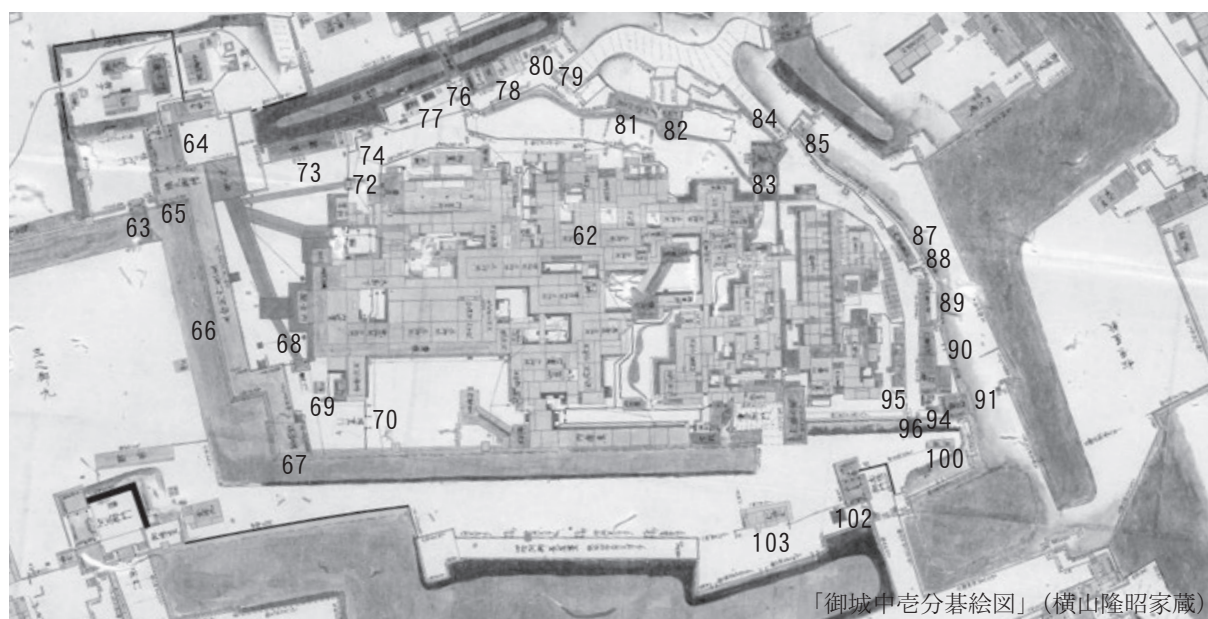


図6 後期 (II 類) 二ノ丸

1. 城内各所の記載情報の変化

(1) 二ノ丸（地点62～98）

前期建物配置図には、二ノ丸御殿（地点62）が描かれる。A～C類には御殿全体が描かれ、D類は御広間、御台所、御舞台、楽屋御長屋、裏御門、御長屋のみを描く。D類のみ裏御門前に番所（地点97）を描く。A類には、御式台、御中式台、御広間、御舞台、御長屋、御台所、御歩番所、柳之間、檜垣之間、御小書院、松之御間、御奥書院、奥御式台、御次、御広式、御長屋、御裏御門と部屋名等が記される。B類には加えて、御表に虎之間、御居間廻に御膳所、波之御間、桐之御間、御楽屋多門、部屋方の部屋名等が書かれ、逆に、御奥書院の名前が書かれなくなる。C類には間取りも描かれるため、室名もより詳細に描かれる。A、B類に関しては、明確な形状の変化をとらえることはできないが、C類については、御広式、部屋方の形状が変化していることが見て取れる。

三ノ丸側に、一ノ門（地点63）、橋爪御門（地点64）、御櫓（橋爪御櫓）（地点65）、五十間御長屋（地点66）、御櫓（菱御櫓）（地点67）が描かれる。D類では一ノ門を「ほうあて御門」、橋爪御門を「坂下中御門」と記す。五十間御長屋の二ノ丸側に、唐御門（地点68）が描かれる。この門について、A－3類では、「カラ御門」と記す。C類では唐御門の前に足軽番所（地点69）が描かれる。御櫓（菱御櫓）の後方には、塀中御門（地点70）、足軽番所（地点71）が描かれる。ただし、B、C類では、塀中御門は門ではなく二枚開と記される。

本丸附段側には、御門（地点72）、腰掛（地点73）、埋御門（地点76）、松坂御門（地点79）が描かれる。A－2、A－3、B、C類には番所（地点74）が描かれる。A－1類には、埋御門の名前が記されない。D類には、御門（地点72）に「御台所御門」と名前が記され、その横に足軽番所（地点75）が描かれる。玉泉院丸側には、土蔵が2棟（地点81、83）が描かれる。

御数寄屋敷には、御数寄屋唐御門（地点84）、御長屋（地点93）、足軽番所（地点94）、中御門（地点95）、切手御門（地点96）が描かれる。B、D類には、御数寄屋唐御門の前に御長屋（地点86）が描かれる。A－3類では、中御門（地点95）を「辰御門」と記す。D類では、御長屋（地点86）を「足軽番所」、御長屋（地点93）を「上御番所」と記し、炭置場（地点92）が描かれる。

後期建物配置図には、文化の大火再建後の二ノ丸御殿（地点62）が描かれている。絵図によって御殿の形状が変化しており、作事の痕跡がうかがえる。室名も多く描かれており、Ⅱ、Ⅲ期絵図では、間取りも描かれる。

三ノ丸側に、一之門（地点63）、橋爪御門（地点64）、橋爪御櫓（地点65）、五十間御長屋（地点66）、菱御櫓（地点67）が描かれる。五十間御長屋の二ノ丸側に、唐御門（地点68）とその前に足軽番所（地点69）が描かれる。菱御櫓の後ろに塀重御門（地点70）が描かれる。

本丸附段側には、御台所御門（地点72）、腰掛（地点73）、足軽番所（地点74）が描かれる。前期絵図にある埋御門の長屋台上に、御門（地点76）、物置2棟と外縋（地点77）、御手廻詰所（地点78）が描かれる。Ⅳ期絵図では、物置2棟と外縋（地点77）の場所に御手廻詰所が描かれ、御手廻詰所（地点78）の場所には奥御納戸御土蔵が描かれる。松坂御門（地点79）は櫓門から単層門に形を変えて描かれ、その前に番所（地点80）が描かれる。玉泉院丸側には、奥御納戸土蔵（地点81）、御土蔵（地点83）が描かれる。両土蔵の間にⅡ期、Ⅲ期絵図には、御庭籠（地点82）が描かれる。

御数寄屋敷には、御数寄屋御門（地点84）が櫓門から単層門に形を変えて描かれ、その前に番所（地点85）が描かれる。御籠置場（地点87）、外縋（地点88）、御広式物置2棟（地点89、90）、御土蔵（地点91）、番所（地点94）、御広式入口御門（地点95）、切手御門（地点96）が描かれる。



図7 前期（B－1類）三ノ丸

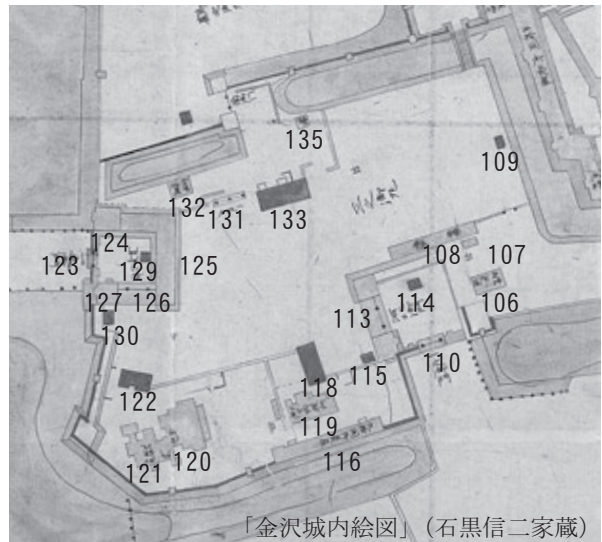


図8 後期（I類）三ノ丸

(2) 三ノ丸

前期建物配置図について、土橋御門周辺には、土橋御門（地点102）、御番所（地点103）、四十間御長屋（地点104）、御櫓（地点105）、切手御門前に、コシ掛（地点100）が描かれる。ただし、A－3類にはコシ掛は描かれない。D類では切手御門前に乗物置場（地点99）、土橋御門横にコシカケ（地点101）が描かれる。

河北御門周辺には、定掃除小屋（地点106）、腰掛（地点108）、内堀前に番所（地点109）が描かれる。ただし、A－3類には番所は描かれない。河北御門は、一ノ御門（地点110）、御櫓（地点111）、御長屋（地点112）、河北御門（地点113）、足輕番所2棟（地点114、115）が描かれる。A－1類では一ノ御門、河北御門をそれぞれ「河北一ノ御門」、「河北二ノ御門」と記す。また、一ノ御門をA－3類では「枳形御門」、D類では「ほうあて御門」と記す。九十間御長屋周辺には、九十間御長屋（地点116）、与力番所（地点118）、御弓所（地点119）、稽古所（地点120）、磨所（地点121）、与力番所（地点122）が描かれる。B、C、D類には、三ノ丸北東隅に御櫓（地点117）がはっきりと描かれる。磨所（地点121）は、C類では「御鉄砲掃除所」、D類では「御鉄砲磨所」と記す。

石川御門は、一ノ御門（地点123）、御櫓（地点124）、御長屋（地点125）、石川御門（地点126）、御櫓（地点127）、御長屋（地点128）、足輕番所2棟（地点129、130）が描かれる。A－1類では一ノ御門、石川御門をそれぞれ「石川一ノ御門」、「石川二ノ御門」と記し、D類では一ノ御門を「ほうあて御門」と記す。南御門周辺には、御門（地点131）、御番所（地点133）、割場御道具蔵（地点134）、釣鐘さや（地点135）が描かれる。A－1類では、御門は「八枚戸」となっている。

後期建物配置図について、土橋御門周辺には、土橋御門（地点102）、御番所（地点103）、切手御門前に、腰掛（地点100）が描かれる。

河北御門周辺には、定掃除小屋（地点106）、腰掛（地点108）、内堀前に番所（地点109）が描かれる。Ⅲ期以降の絵図には、掃除方物置（地点107）が描かれる。河北御門は、一之御門（地点110）、河北御門（地点113）、番所2棟（地点114、115）が描かれる。九十間御長屋周辺には、九十間御長屋（地点116）、与力番所（地点118）、御弓所（地点119）、稽古所（地点120）、御鉄砲所（地点121）、与力番所（地点122）が描かれる。九十間御長屋は、新丸側の一部のみに縮小されている。Ⅲ期絵図では、御鉄砲所を「細工所」と記す。

石川御門は、一之御門（地点123）、御櫓（地点124）、御長屋（地点125）、石川御門（地点126）、御櫓（地点127）、足輕番所2棟（地点129、130）が描かれる。南御門周辺には、門（地点131）、御

番所（地点133）、鐘（地点135）が描かれる。Ⅰ期絵図では、門（地点131）は「八枚開」と記される。また、石川御門の後方に、Ⅰ期絵図では御石場物置（地点132）、Ⅳ期絵図では物置が描かれる。



図9 前期（A-1類）鶴ノ丸

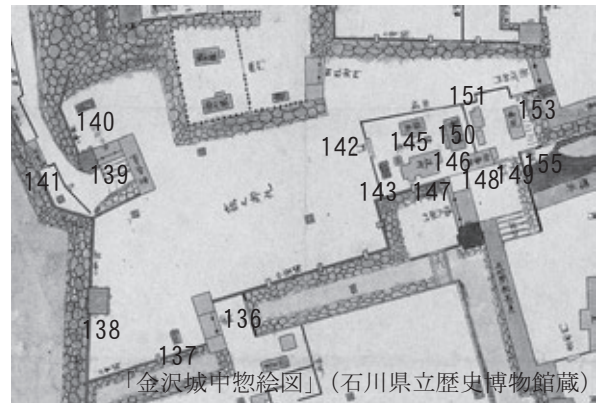


図10 前期（B-1類）鶴ノ丸

（3）鶴ノ丸（地点136～155）

前期建物配置図には、南御門（地点136）、足輕番所（地点137）、水手御門（地点139）、足輕番所（地点140）、御番所（地点141）が描かれる。B、C、D類には御櫓（地点138）を描く。御番所は、B-1類、B-2類の『金沢城絵図』とC類では「明番所」と記す。D類では南御門を「鶴御丸御門」とする。

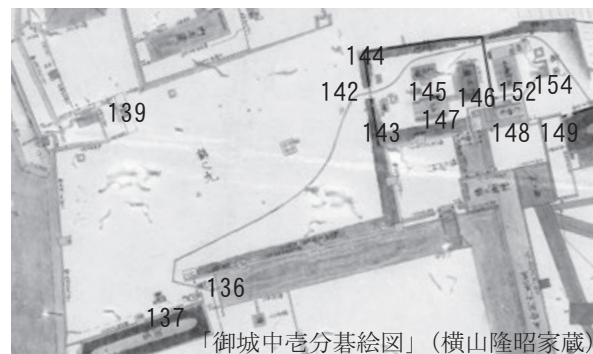


図11 後期（Ⅱ類）鶴ノ丸

諸方には、御門（地点142）、足輕番所（地点143）、御土蔵2棟（地点145、146）、役所（地点147）が描かれる。B類では土蔵（地点145）に「銭蔵」と記す。D類では、御門（地点142）を「諸方御土蔵前御門」、役所を「諸方御土蔵役所」と記す。

御厩には、御番所（地点148）、御門（地点149）、御長屋2棟（地点150、151）、御厩（地点153）、御門（地点155）が描かれる。ただしA類には、御長屋（地点150）は描かれない。御厩（地点153）は、A、C類ではL字型であるが、B、D類では長方形となっており、B類のみ御長屋2棟（地点150、151）と距離をおき、本丸附段側に描かれている。D類では御長屋（地点150）に「外練」、御長屋（地点151）に「御飼料所」、御門（地点149）に「御厩前御門」、御門（地点155）に「御堀内巽方御門」と名前を記す。

後期建物配置図には、南御門（地点136）、番所（地点137）、水之手御門（地点139）を描く。南御門、水之手御門が櫓門から単層門に形を変えて描かれる。

諸方には、諸方役所御門（地点142）、番所（地点143）、コシカケ（地点144）、御土蔵2棟（地点145、146）、諸方役所（地点147）が描かれる。ただし、Ⅱ期の「金沢御城之図」には、諸方役所御門は描かれない。

御厩には、御番所（地点148）、御門（地点149）、五正建御厩（地点152）、洗場（地点154）が描かれる。



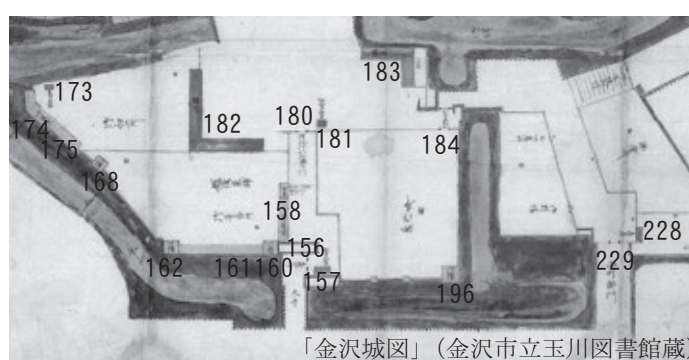
「金沢城中惣絵図」(石川県立歴史博物館蔵)

図12 前期(B-1類)新丸



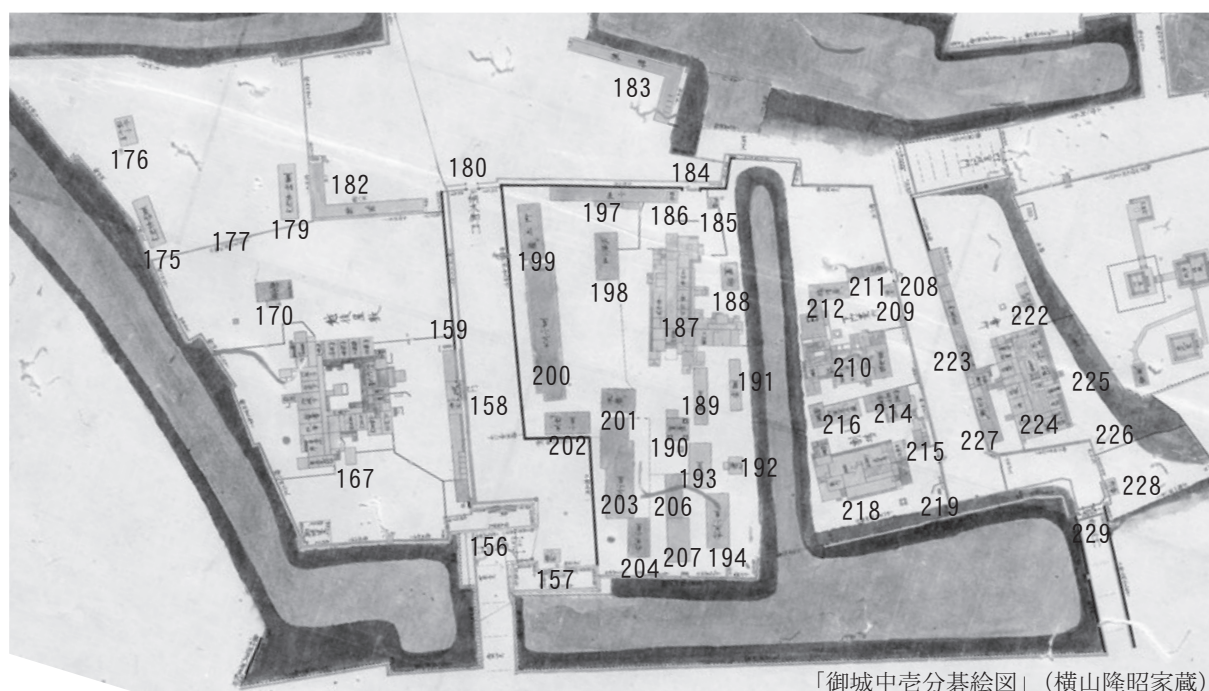
「金沢城図」(横山隆昭家蔵)

図13 前期(A-1類)越後屋敷



「金沢城図」(金沢市立玉川図書館蔵)

図14 前期(D類)新丸



「御城中壺分基絵図」(横山隆昭家蔵)

図15 後期(Ⅱ類)新丸

（４）新丸（地点156～229）

前期建物配置図について、尾坂御門周辺には、尾坂御門（地点156）、足輕番所（地点157）が描かれる。越後屋敷には、御門（地点158）、御櫓（地点160）、御長屋（地点161）、御櫓（地点162）、物置3棟（地点163～165）、厠（地点166）、越後屋敷（地点167）、御櫓（地点168）、御土蔵2棟（地点169、170）、時鐘所（地点171）が描かれる。B類には、厠（地点166）は描かれず、御門（地点158）は、半分くらいの長さで描かれる。A－1類には、御櫓（地点162）は描かれない。D類では、御寄合所埋御門（地点158）、御櫓（地点160）、御長屋（地点161）、御櫓（地点162）、御櫓（地点168）のみ描かれ、中には、「越後屋敷 御寄合所」と記す。

御細工所には、割場道具蔵（地点172）、足輕番所（地点173）、御長屋2棟（地点174、175）、御細工所（地点178）、御土蔵（地点179）が描かれる。D類には足輕番所（地点173）、御長屋2棟（地点174、175）のみ描かれる。

桐木御門周辺には、柵（桐）御門（地点180）が描かれる。A－1類に「桐之木御門」、D類に「河北御門外柵御門」と名前が記される。D類のみ門前に足輕番所（地点181）が描かれる。また、御細工所と越後屋敷に沿って腰掛（地点182）、三ノ丸との内堀沿いに腰掛（地点183）が描かれる。

御作事所には、御門（地点184）、足輕番所（地点185）、御長屋（地点186）、御作事所（地点187）、釜屋（地点189）、小作事小屋（地点191）、板批小屋（地点193）、御長屋（地点194）、御長屋（地点195）、御櫓（地点196）、荒物所（地点197）、寺社方（地点198）、内作事方大工小屋（地点200）、木挽小屋（地点201）、物置小屋（地点202）、物置小屋（地点203）、外作事方大工小屋（地点205）、御長屋（地点206）、物置小屋（地点207）が描かれる。D類には御作事御門（地点184）と御櫓（地点196）以外の建物は描かれない。

下御台所には、入口（地点208）、御長屋（地点209）、下御台所（地点210）、物置（地点211）が描かれる。A－1類のみ御長屋は、御門と記されて、長屋門のように描かれている。割場には、御道具奉行役所（地点214）、御土蔵（地点213）、道具奉行支配物置（地点216）、割場（地点218）、御土蔵（地点217）が描かれる。会所には、御長屋・御門（地点223）、御土蔵（地点220）、御長屋2棟（地点221、222）、会所（地点224）と接続する土蔵2棟（地点225、226）が描かれる。西丁口御門周辺には西丁（口）御門（地点229）とその前に足輕番所（地点228）が描かれる。

後期建物配置図について、尾坂御門周辺には、尾坂御門（地点156）、番所（地点157）が描かれる。越後屋敷には、御門（地点158）、厠（地点159）、越後屋敷（地点167）、御土蔵（地点170）が描かれる。越後屋敷は宝暦の大火で焼失し、文化8年に再建⁽³⁾されたため、平面が変わっている。

御細工所跡には、材木小屋3棟（地点175、177、179）、鍛冶小屋（地点176）が描かれる。Ⅱ期絵図では、材木小屋が2棟（地点175、179）になり、「御作事物置」と記され、鍛冶小屋は「鉛水干小屋」と記される。Ⅲ期絵図には、3棟とも「御作事方物置」と記される。Ⅳ期絵図には、鉛水干小屋（地点176）1棟のみが描かれる。

桐木御門周辺には、桐木御門（地点180）が描かれる。御細工所と越後屋敷に沿って腰掛（地点182）、三ノ丸との内堀沿いに腰掛（地点183）が描かれる。

御作事所には、入口（地点184）、番所（地点185）、腰掛（地点186）、役所（地点187）、物置（地点188）、壁小屋（地点189）、釜小屋（地点190）、物置（地点191）、御土蔵（地点192）、材木小屋（地点194）、板批小屋（地点197）、水樋小屋（地点198）、内作事大工小屋（地点200）、内作事木蔵（地点201）、内作事木挽小屋（地点202）、外作事大工小屋（地点203）、材木小屋（地点204）、材木小屋（地点206）、大工小屋（地点207）が描かれる。Ⅱ期絵図以降では材木小屋（地点193）、御

土蔵（地点199）が描かれ、建物が増えたことが伺える。Ⅳ期絵図には、木蔵（地点201）が描かれなくなり、隣接する外作事大工小屋（地点203）の形が変わっており、建て替えられたと見られる。

下御台所には、御門（地点208）、番所（地点209）、下御台所（地点210）、塩噌蔵（地点212）、薪入所（地点211）が描かれる。割場には、御道具所（地点214）、掃除所（地点215）、御道具土蔵（地点216）、割場役所（地点218）が描かれる。Ⅱ期以降の絵図には厠（地点219）も描かれる。会所には、Ⅰ期絵図には、御長屋（地点223）、御荷物認所（地点222）、会所（地点224）と接続する土蔵2棟（地点225、226）が描かれるが、Ⅱ期絵図以降では、会所及び土蔵2棟が長方形の会所の建物と長方形の御土蔵（地点227）に変化する。会所は宝暦の大火では焼失していないが、文政8年（1825）に建て替えたと記録⁽⁴⁾があり、Ⅱ期以降の絵図は建て替えられた姿を示している。西丁口御門周辺には西丁口御門（地点229）とその前に番所（地点228）が描かれる。



図16 前期（A－1類）御宮



図17 後期（Ⅱ類）御宮

（5）御宮（地点230～246）

前期建物配置図には、新丸との境に、御宮坂御門（地点230）が描かれる。D類には、その前に番所（地点231）が描かれる。御宮の入口に御門（地点232）が描かれるが、内部の建物は一切描かれない。

甚右衛門坂御門周辺には、甚右衛門坂御門（地点243）が描かれる。D類の一部には、甚右衛門坂御門の南側に建物（地点245）が描かれる。甚右衛門坂御門（地点243）はA、B類では、L字型の櫓門であるが、C、D類ではコの字型の櫓門が描かれ、D類では、御門続きに御長屋（地点244）が描かれる。

後期建物配置図には、新丸との境に、御宮坂御門（地点230）が描かれる。御宮内部に建物が描かれるようになり、入口より御門（地点232）、楼門（隋神門）（地点233）、鳥居（地点234）、御手水鉢（地点235）、山王社（地点236）、拝殿（地点237）、本地堂（地点238）、御宮（地点239）、御供所（地点240）、宝蔵（地点241）、厠（地点242）が描かれる。Ⅲ期絵図より宝蔵が描かれなくなり、Ⅳ期絵図には、厠も描かれなくなる。

甚右衛門坂御門周辺には、甚右衛門坂御門（地点243）、時鐘所（地点246）が描かれる。

〔藤右衛門丸〕（地点247）

前期建物配置図には何も描かれず、後期建物配置図には物置（地点247）が描かれるようになるが、Ⅳ期絵図には描かれない。



図18 前期 (A-1 類) 金谷出丸



図19 前期 (B-1 類) 金谷出丸

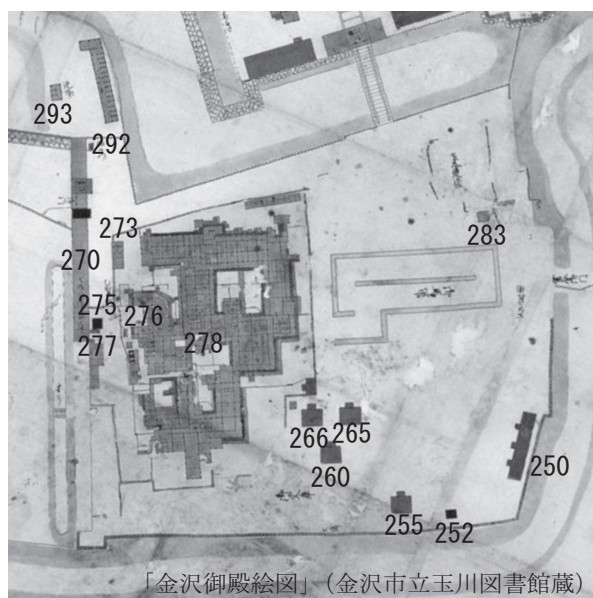


図20 前期 (C 類) 金谷出丸

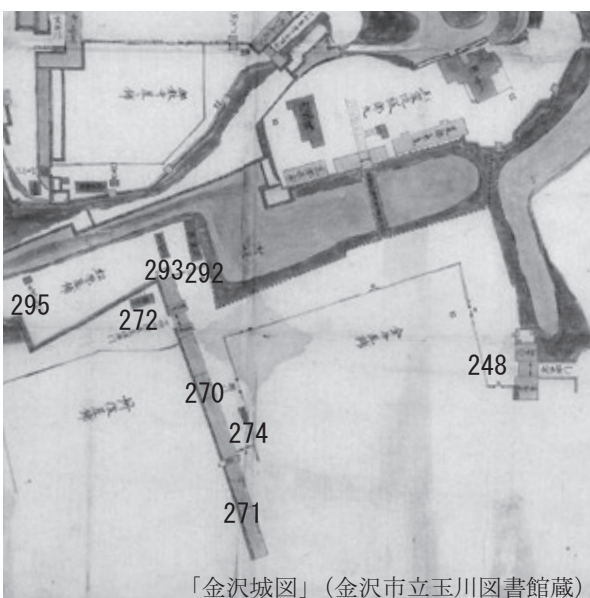


図21 前期 (D 類) 金谷出丸

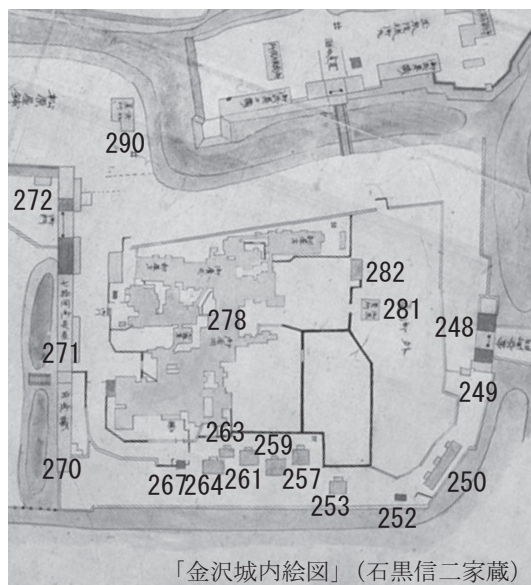


図22 後期 (I 期) 金谷出丸

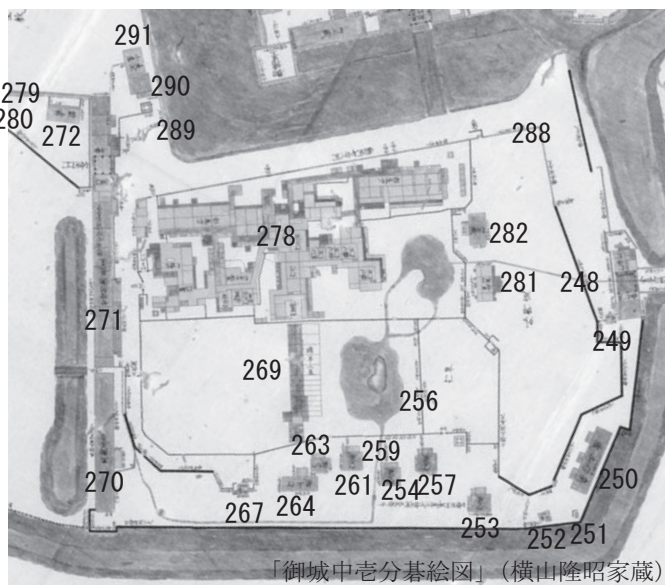


図23 後期 (II 期) 金谷出丸

（６）金谷出丸（地点248～288）

前期建物配置図について、A、B、C類は廊全体が描かれるが、D類は東側の外周部のみが描かれる。金谷御門周辺には、金谷御門（地点248）、足輕番所（地点249）が描かれる。御文庫周辺には、南御土蔵（地点250）、足輕番所（地点252）、A類で土蔵5棟（地点255、258、260、262、266）、B類で土蔵6棟（地点255、258、260、262、265、266）、C類で土蔵4棟（地点255、260、265、266）が描かれる。少し離れた位置に足輕番所（地点268）が描かれる。七十間御長屋周辺には、七十間御長屋（地点270、271）とB、D類にコシカケ（地点272）が描かれる。

御広式周辺には、御広式（地点278）、御長屋（御門）（地点273）、切手御門（地点275）が描かれる。A～C類には、切手御門の西側に足輕番所（地点277）が描かれるが、D類では東側に番所（地点274）が描かれる。A類とC類に御門（地点276）が描かれる。御広式はA、B類では外形のみ描かれ、C類では間取りと室名が描かれるようになる。A、B類では形状の変化は確認できないが、C類では形状が変化している。A－1類では御長屋（地点273）は長屋門として描かれるが、他のA類とB類には御長屋のみが描かれ、C類ではコシカケと記される。

厩周辺には、七疋立御厩（地点286）と御長屋が3棟（地点283、284、285、287）が描かれる。そのうち1棟の配置がA類とB類で異なっており、B類では、御長屋（地点285）が描かれず、御長屋（地点284）が描かれる。C類では御長屋（地点283）のみ描かれるが、色紙が剥離したためである。

後期建物配置図について、金谷御門周辺には、金谷御門（地点248）、足輕番所（地点249）が描かれる。御文庫周辺には、南御土蔵（地点250）、足輕番所（地点252）、御書物御土蔵4棟（地点253、257、259、261）、御納戸御土蔵（地点263）、奥御納戸御土蔵（地点264）、番所（地点267）が描かれる。Ⅱ期以降の絵図には、南土蔵の南に厠（地点251）が描かれる。Ⅱ期絵図には、綿羊小屋（地点269）が描かれる。Ⅳ期絵図には、御書物御土蔵（地点253）の隣に番所（地点254）、向かいに御土蔵（地点256）が描かれるが、金谷御殿が拡張されたため、御書物御土蔵（地点261）、番所（地点267）が描かれなくなる。

七十間御長屋周辺には、七十間御長屋（地点271）が描かれるが、西側が玉御土蔵（地点270）として明確に区別して描かれるようになる。七十間御長屋前に腰掛（地点272）が描かれ、Ⅳ期絵図には、七拾間外柵御門（地点280）、番所（地点279）が描かれる。

金谷御殿（地点278）の形は、絵図によって御殿の形状が変化している。Ⅰ期絵図には部屋方、御広式、部屋方、御居間、御舞台、奥口と部屋名等が描かれる。Ⅱ期絵図では西半分がなくなり、綿羊小屋（地点269）が描かれる。Ⅲ期絵図になると綿羊小屋がなくなり、御殿空間が広がる。Ⅳ期絵図では御殿空間がさらに拡張され、「金谷御殿」と「松之御殿」と名前が記される。なお、Ⅱ、Ⅲ期絵図には、間取りと室名が詳細に描かれる。

前期と馬場の向きが変わっており、馬場の北側には、御馬見所（地点281）と御土蔵（地点282）が描かれる。Ⅳ期絵図には、金谷出丸南西隅に物置（地点288）が描かれる。

（７）松原屋敷（地点289～295）

前期建物配置図には、十五疋建御厩（地点292）、洗場（地点293）、厠（地点294）が描かれる。A類には、洗場は描かれない。D類には、十五疋建御厩を「仮御厩」、洗場を「御露地小屋」としている。また、北側に足輕番所（地点295）を描いている。

後期建物配置図では、Ⅰ期絵図には、乗物置場（地点290）が描かれる。Ⅱ期、Ⅲ期絵図には、隣接して大工小屋（地点291）が描かれる。Ⅳ期絵図には、乗物置場、大工小屋がなくなり、松之御殿物置（地点290）、玉薬役所（地点289）が描かれる。

2. 建物配置図の景観年代について

これまで各郭ごとの記載内容について、概要を述べてきたが、ここで前稿で紹介した郭もあわせて、絵図の景観年代について、考察を行っていきたい。

(1) 前期建物配置図について

前期建物配置図についてまとめると、今回、A類を3系統に分類しているが、これは描写内容に細かい違いが見られたためである。A-1類には新丸の御櫓（地点162）は描かれず、A-3類に、切手御門前のコシ掛（地点100）、三ノ丸内堀前の番所（地点109）が描かれないという違いがある。いずれも写本のため、原本の差というよりは、写し漏れと評価しておくのが適当である。また、B類は注記の違いから2系統に分類しているが、B類のなかで表現方法や写し漏れによる違いはあるものの、景観年代の差に結びつくような違いは確認できなかった。

A類とB類の違いは、B類に御数寄屋唐御門前の足輕番所（地点86）、三ノ丸北東隅の御櫓（地点117）、御厩の御長屋（地点150）、鶴ノ丸の御櫓（地点138）、金谷出丸御文庫の土蔵（地点265）、七十間御長屋前のコシカケ（地点272）が描かれるようになる。また、御厩の御厩（地点153）の形及び位置、越後屋敷の御門（地点158）の長さがA、C類と異なっている。

B類とC類との違いは、二ノ丸御殿と金谷御殿の形状が変化することと、C類に二ノ丸唐門前に番所（地点69）が描かれるが、塀中御門前の番所（地点71）は描かれなくなる。

D類は、二ノ丸の西半分、御細工所、越後屋敷、御作事所、下御台所、割場、会所、金谷出丸において、内部の建物が描かれていないという大きな違いがあり、加えて描かれている部分でもA、B、C類と比較して建物の配置や形状が大きく異なる。D類のみに描かれる主なものとして、本丸の乾場（地点20）、玉泉院丸の御亭（地点54）、切手御門前の乗物置所（地点99）、桐木御門前の足輕番所（地点181）御宮坂御門前の足輕番所（地点231）があげられる。また、建物の名称もA、B、C類と大きく異なっているところがあり、例えば、橋爪門、河北門、石川門の一ノ門（地点63、110、123）を「ほうあて御門」と、橋爪御門（地点64）を「坂下中御門」、松原屋敷の十五疋建御厩（地点293）を「仮御厩」、洗場（地点293）を「御露地小屋」としている。D類は、部分的にA、B、C類よりも古い情報を持ち合わせている可能性があるが、同じ編年軸で評価することができないため、今回は記載内容の紹介に止めておく。

ついでに、A、B、C類の景観年代を再検証してみることにする。元禄元年（1688）に御宮付近から越後屋敷に移設された時鐘⁽⁵⁾と同年に建てられた金谷出丸の七疋立御厩⁽⁶⁾が描かれていること、元禄7年から10年（1694～97）にかけて二ノ丸御殿が増築され、御数寄屋敷に新設された部屋方を描いているので、いずれも上限は元禄10年（1697）以降となると見解⁽¹⁾が示されてきた。

A、B、C類の年代は、宝暦5年（1755）に幕府の巡検上使に提出した金沢城図⁽⁷⁾に描かれた二ノ丸御殿、金谷御殿の形にきわめて近いこと、C類については、その直前の年代と評価されてきた⁽¹⁾。元禄10年以降の御殿の作事記録としては、享保19年（1734）に金谷御殿広式の普請⁽⁸⁾、宝暦3年（1753）にも二ノ丸御殿の改築⁽⁹⁾があり、詳細な記録が残されていないものの、C類はそれらを反映しているものと考えられる。また、この宝暦5年「金沢城図」の下台所には「辰年出来」と書かれた新たな物置が描かれており、この物置はA、B類には描かれていないため、A、B類は宝暦5年（1755）以前の直近の辰年である寛延元年（1748）以前を描くものと言えるだろう。なお、C類にもこの物置は描かれていないが、貼絵図であり、貼紙がはがれている可能性を考慮する必要があるため、年代判断の根拠にできない。

A、B類はC類よりさかのぼるものとして、A類、B類の順を検討してみる。これまでに示した変

化箇所造営記録が確認できれば、A類とB類の年代差とすることができ、現在のところ確認されていない。B類の方が建物数が増えるので、B類の方が後出のものとされてきたが、三ノ丸北東隅の御櫓、鶴ノ丸の御櫓は、元禄以前の地割図系の絵図⁽¹⁰⁾に描かれているため、これを元にA、B類に年代差があるとまでは言えないだろう。A類の中でも伝本の差があり、絵図が写されたときに描かれなかった可能性を考慮すべきであり、現状ではA、B類の間で景観年代の違いを明らかにできないと考えられる。

以上の点から、現状では、A、B類は1700～30年頃、C類は1750年頃の新金沢城を描いていると評価するのが適当である。

(2) 後期建物配置図について

後期建物配置図の変化をまとめてみると、Ⅰ期とⅡ期の違いは、Ⅱ期に本丸附段の御座敷方物置(地点35)、玉泉院丸の御武具土蔵(地点61)、二ノ丸御居間廻の御庭籠(地点82)、御数寄屋唐御門前の足輕番所(地点85)、二ノ丸御数寄屋の御籠置所(地点87)、外縹(地点88)、物置2棟(地点89、90)、御土蔵(地点91)、御作事所の材木小屋(地点193)、御土蔵(地点199)、割場の厠(地点219)、金谷出丸の綿羊小屋(地点269)、松原屋敷の大工小屋(地点291)が描かれるようになるが、本丸の物置(地点21)と三ノ丸の石川門後方にあった御石場物置(地点132)が描かれなくなる。また、会所(地点224)が建て替えられ、ほぼ長方形の建物が描かれるようになる。このうち変化した年代が確認できるのは、玉泉院丸の御武具土蔵の建築(文政4年(1821))⁽⁴⁾、綿羊小屋の竹沢御殿から金谷出丸への移転(文政8年(1825))⁽⁴⁾、会所役所の建替(同8年)⁽⁴⁾である。

Ⅱ期絵図は前田育徳会所蔵の「金沢御城之図」、加賀八家の横山家に伝わる文政13年(1830)作成の「御城中壺分碁絵図」、藩の御大工であった渡部家に伝わる天保13年(1842)写の「金沢城絵図」の3枚であり、写された年代が異なるものの、景観年代としては同一のものと評価されていた⁽²⁾。今回一棟一棟確認したが、注記の違いが若干みられるだけで、描かれているものはほぼ同一であった。

Ⅱ期とⅢ期の違いは、Ⅲ期に三ノ丸に掃除方物置(地点107)が描かれるようになるが、御宮の宝蔵(地点241)が描かれなくなる。金谷出丸の綿羊小屋(地点269)がなくなり、金谷御殿(地点278)が西側に広がる。

Ⅲ期とⅣ期の違いは、Ⅳ期に三ノ丸石川門後方に物置(地点132)、金谷出丸の番所(地点254)、御土蔵(地点256)、金谷出丸南西隅の物置(地点288)、松原屋敷の玉薬役所(地点289)が描かれるようになるが、二ノ丸御居間廻の御庭籠(地点82)、諸方のコシカケ(地点144)、旧御細工所の御作事方物置3棟(地点175、177、179)、会所の御荷物認所(地点222)、御宮の厠(地点242)、藤右衛門丸の物置(地点247)、金谷出丸の御書物御土蔵(地点261)、番所(地点267)、松原屋敷の大工小屋(地点291)が描かれなくなる。東ノ丸附段土蔵の形状が変わり、現存の新金沢城土蔵(鶴丸倉庫)(地点14)が描かれる。二ノ丸の御門(地点76)東にある物置2棟と外縹(地点77)が御手廻詰所に、西にある御手廻詰所が(地点78)奥御納戸御土蔵に変化する。御作事所の木蔵(地点201)がなくなり、外作事大工小屋(地点203)の形状が変化する。松原屋敷の乗物置所(地点290)が松之御殿物置に変化する。

以上がⅠ～Ⅳ期絵図において、変化した箇所であるが、これに基づいて景観年代を整理してみる。

Ⅰ期絵図の景観年代は、文化の大火で再建された二ノ丸御殿を描き、文化8年に再建された越後屋敷⁽³⁾を描き、鼠多門を「玉泉院様丸御門」とせず「鼠多御門」としていること⁽¹¹⁾から、文化8～13年(1811～16)の年代が与えられていたが、これ以上絞りこむことはできなかった。Ⅱ期絵図は、金谷出丸に綿羊小屋が描かれること、会所役所が建て替えられていることから上限は文政8年であり、

下限は金谷御殿の形状に求めることになり、天保3～4年（1832～33）の延之助入居に伴う改築⁽¹²⁾以前の形状とみられること⁽¹⁾から天保3年である。Ⅲ期絵図は、Ⅱ期、Ⅳ期絵図と違いがあるが、年代を判断できる材料は金谷御殿の形状の他にはなく、前述の天保4年の延之助入居以降、天保9年（1838）に真龍院が入るまでの景観を描くもの⁽¹⁾である。Ⅳ期絵図は、Ⅲ期絵図と比べて変化箇所が多いものの、年代を判断できるものとしては嘉永元年に建てられた金沢城土蔵（鶴丸倉庫）と絵図に「嘉永3年改正」と記されていることになり、嘉永元年（1848）から嘉永3年（1850）までの景観を描くものである。

おわりに

今回、金沢城建物配置図を分析したところ、絵図の変化箇所が詳細に明らかとなり、金沢城の建物の変遷や建物配置図の編年を考えるうえで基礎的な情報を得ることはできたが、建物配置が変化した理由・年代を明らかにできたのはごく一部に限られたため、金沢城建物配置図の景観年代のさらなる絞り込みは今後の課題である。

今回分析を行った建物配置図以外の建物部分図、地割図、文献史料の解読を積み重ねていくことによって、個々の建物の変化した年代が判明すれば、金沢城建物配置図の景観年代がさらに絞り込むことができるため、今後とも調査研究に取り組んでいきたい。

〔註〕

- （1）金沢城研究調査室（木越隆三）「金沢城全域絵図の分類と編年-金沢城絵図調査報告Ⅰ-」『金沢城研究』2号 2004
- （2）金沢城調査研究所『金沢城史料叢書6 金沢城全域絵図と金沢城 絵図で見る金沢城』2008
- （3）『加賀藩史料』12 文化8年3月6日条
- （4）木越隆三「金沢城作事所に関する断簡史料（1）一名倉氏採集襖下張文書（金沢大学文学部日本史研究室蔵）―」『金沢城研究』4号 2006
- （5）『加賀藩史料』4 元禄元年7月3日条
- （6）『加賀藩史料』4 元禄元年9月10日条
- （7）宝暦5年2月作成「金沢城図」10枚 金沢市立玉川図書館蔵
- （8）『加賀藩史料』6 享保19年6月16日条
- （9）『加賀藩史料』7 宝暦3年8月朔日条
- （10）「金沢城内絵図」安土城考古博物館蔵 万治2年～延宝4年の地割図
- （11）『加賀藩史料』12 文化13年4月18日条
- （12）『加賀藩史料』14 天保3年9月朔日、天保4年2月26日条